

6.2 教育研究指導のあり方

進捗状況報告

【6.2.3】 社会人や外国人の大学院生については特別な措置は行っていないが、2006年度には外国人2名が修士学位、社会人1名が博士学位を取得しており、現在問題なく順調に教育・研究が行われている。

【6.2.4】 大学院における研究指導は、少人数で密に行われている。その結果として、多くの学会発表やそして査読付きの英語学術論文への投稿がある。生命科学専攻では新しい試みとして、複数教員による指導体制を取っており、教員間で教育・研究指導について意思疎通をはかっている。大学院生の研究プロジェクトへの参加については、大学院学生の多くが現在進行中の高度化推進事業（8件）、戦略的創造研究事業（CREST、1件）、独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO、1件）のプロジェクトのいずれか（複数の場合もある）に関係した研究を行っており、世界的レベルの高度な研究を通して教育訓練を受けている。授業における履修指導においては、各指導教授が学生が偏った授業をとらないように指導している。しかし、最近高校までのゆとり教育の弊害で、4年間の学部の授業のみでは学生の学力が大学院における先端教育を理解できるレベルに到達しない場合が想定され、大学院の授業内容も見直す段階にきていると考えられる。

【6.2.5】 大学院連携は、当研究科のように小さな所帯では、学生の教育や研究を幅広いものにするには不可欠である。先に述べたように、生命科学専攻と理化学研究所 発生・再生科学総合研究センターとの連携については、2007年度で3年目を迎え、順調に進展している。化学専攻と物理専攻の「SPRING-8」すなわち日本原子力研究開発機構、理化学研究所、高輝度光科学研究センターとの連携については、6人の著名な研究者を客員教員として迎えているが、2007年度にスタートしたばかりであり、今のところ評価できない。しかし、研究室レベルにおいては、既に多くの共同研究の成果があがっており、おそらく順調に進行するものと考えられる。

学内第三者評価

認証評価では、「理工学研究科において、少人数クラス制授業と、一対一での研究指導により、緊密な教育指導体制がとられており、その成果の一つとして、学生によるレフェリー付き英語学術雑誌への論文発表や学会発表が多数なされていることは評価に値する」と長所として指摘されており、教育研究指導の体制における評価は高い。大学院連携についても日本を代表する研究機関との連携が進んでいる。

大学院入学段階での学力の低下については、ゆとり教育の弊害だけでなく、さまざまな要因が複合的に絡んで起き、中期的には改善されにくいと想定され、大学院教育の内容についてこの視点からの検討が望まれる。